

使徒言行録27章 1-44 節

『元気を出しなさい』

使徒言行録も終わりに近づいてきました。今朝は27章を全部読みました。この27章の全体から主のみ心に聞いてまいりたいと思います。

パウロは、いよいよローマに行くことになります。しかしそれはあくまでも囚われの身のままで、護送される、というものでした。けれど、どんな形であれ、とにかくにもパウロは長いあいだ願っていたローマに行くのです。27章はその旅の記録、しかも今回はそのほとんどが船によるものでしたから、航海記録と言っていい聖書箇所です。パウロがエルサレムの町で、捕らえられ、拘禁されてから、長い裁判の様子や、王や総督の前での弁明を使徒言行録はていねいに、子細に書き記してきました。そのうえ、それに加えて27章の子細な航海記録。ルカはこれでもかこれでもかと実に丁寧に書き込んでいきます。

今朝はパウロのローマまでの旅の地図をお配りしました。ですから細かいことは地図を見ながら、家に帰ってからゆっくり確認してほしいと思いますが、いまは、航海の概略を受けとめておきたいと思います。わたしは船に関する知識はないも同然、ほとんど何もわかっていません。ただこの聖書の時代も含め長いあいだ、航海するための大きな船は帆船（はんせん）と呼ばれるマストと帆を組み合わせ、風と潮流、によって進められる船と、ガレー船と呼ばれる人力で櫓を漕ぐ船の二種類だけだったそうです。人力で船を漕ぐガレー船というのは、帆船に比べ力も弱く、持久力もなく、したがって比較的近い距離を、それも岸に沿って進む船でした。パウロたちが乗り込んだのは、帆船で、当然、風向きと潮流に依存せざるを得ない船です。わたしたちは船と言えば、動力のついた自由自在に運転できるものをふつうに想像しますが、この時代の船はそのようなものではない。というか人類は長いあいだ、帆船以上の船は持っていなかったのです。27章を読み進むのに、最低必要な船の知識は、帆船だった、ということです。向かい風だったので、とか、船足ははかどらず、とか、風に行く手を阻まれたので、といった表現が繰り返してくるのは、そういう理由によるものです。風に翻弄される。風任せ、風頼み、風を読みながらの航海なのです。それは今から思えばどれほど大変な、航海であることか。したがって風向きによって航路を変更することもしばしばでした。カイサリアを出港した一行はミラという港で、船を乗り換え、苦勞して航海し、クレタ島の「良い港」という名前の港に寄港します。季節はすでに10月に入っていて、航海が危険

な季節を迎えていた。クレタ島のフェニクスという港で冬をすごそうとしたのですが、南風がちょうどよく吹いてきたので、風を頼りに出向するのですが、しかし間もなく暴風に襲われ、風に逆らって進むことはできず、流されるに任せたのです。嵐に襲われ、積み荷も投げ捨てるほかなく、いく日もの間、文字通り生死をさまよひ、もうこれまでか、という希望をたたれた状態になった。14日間も漂流して、アドリア海を進み、マルタ島の近海で船はついに浅瀬に乗り上げ難破してしまった。百人隊長の統率で、泳げるものは飛び込み、陸地に辿りつき、残りの者も、板切れに掴まって全員無事マルタ島に上陸したのです。

確かに、大変な船旅です。命からがら、しかもずいぶん漂流して、ようやくマルタ島についたのです。ルカはどうして、これほど細かい航海の記録を使徒言行録に残したのか、いろいろなことが推察されてきました。一つには、27章の冒頭1節に「わたしたちが」という言葉があって、ルカ自身がこの旅に同行していることがうかがえます。同行者ならではリアリティが27章にはあります。それでルカは自分が見聞きしたことを細大漏らさず書こうとした、というのを理由に挙げる人もいます。またもっと別の意見もあります。それは、ルカという人は旅が好きだった、旅マニアだった、という意見です。旅マニアでもいろいろあって、旅先で何を食べたか、何を見たか、ということに関心を寄せる人もあれば、旅の計画を立てることのマニアもいる。ルカは旅の行程、旅程、旅の実際の記録に関心のある人だったのではないか、という意見で、これは面白い。ルカは使徒言行録の中で、パウロのみならず、例えば8章ではフィリポの旅の途中での出来事を書き記しています。使徒言行録は福音が旅をつづける者たちによって担われていったことを我々に伝えています。

それは、巨視的に見れば、キリスト教の伝道というものが、エルサレムから始まり、各地に向かっていく、それも、福音を携えて、各地へと向かう伝道者、つまり旅する人間によって担われていく、その歩みの全体が旅とも言えるのです。一方で教会は古来船にたとえられてきました。それは教会の歩みが大きな海に向かって漕ぎだす舟のようなものだからでしょう。しかも、パウロが経験したように、教会という船も大海原の中で向かい風にぶつかり、嵐によって行く手を阻まれる、希望を絶たれるようなときもある。ときには船そのものも難破してしまうこともある。ルカの中には、パウロのローマの旅は、ただ一度きりのものではなく、キリスト教会が繰り返し経験していく旅だと映っていたのかもしれない。

そしてその旅において、パウロはその都度、臆することなく、自分の考え、

意見を述べます。10節「皆さん、わたしの見るところでは、この航海は積み荷や船体ばかりでなく、わたしたち自身にも危険と多大の損失をもたらすことになります。」と語りかけ、この航海をこれ以上続けるのは危険であるとの意見を述べます。ただがむしゃらに前に進んでいけ、というのではなく、状況を判断していくパウロがいます。結果的にパウロの意見より、船長や船主の意見によってことは進んだようですが、それもとても、興味深く、別にパウロだからといっても、どんな場面でも自分たちの意見が通るわけではない。しかし、だからと言って腐ったり、もう余分なことは言いません、と言って自分の殻に閉じこもってしまうのでもなく、必要と感じればまた語りかけるのです。21節、人々は自分たちの前途に対して絶望的になり、食事ものどを通らなくなるような状態だった。パウロは今度はこう語る。「皆さん、わたしの言ったとおりに、クレタ島から船出していなければ、こんな危険や損失を避けられたに違いありません。しかし今、あなた方に勧めます。元気を出しなさい。船は失うが、皆さんのうちだれ一人として命を失うものはいないのです。わたしが仕え、礼拝している神からの天使が昨夜私のそばに立って、こう言われました。『パウロ、おそれるな。あなたは皇帝の前に出頭しなければならない。神は、一緒に航海しているすべてのモノを、あなたに任せてくださったのだ。』ですから皆さん、元気を出しなさい。」神が守ってくださる、元気を出しなさい。

一緒に乗船していた人たちは、このパウロの言葉をどう聞いたのでしょうか。どういう反応だったのか、何も書いてないのでわかりません。

しかし、助かる望みが消え失せていこうとするときに、これほどのつよい、確信に満ちた言葉を語る人がいる、ということにはそれじたい、瞠目させられることだったのではないのでしょうか。

けれども、このパウロの一連の言葉を感動して、喜びを持って聞いていた人が一人まちがいなくいます。それは、ルカです。使徒言行録を書いているルカです。

ルカは、これら一連の、一つ一つのパウロの発言を、そして書かれてはいないけれど、これらの発言に至るパウロの行動、たたずまいを感動と喜びをもって、見ていたし聞いていたのです。

実はいろいろな聖書解釈者たちが言っているのですが、ルカにとってパウロは、まちがいなく、英雄だった。困難の連続だったエルサレムの町、拘禁されていたカイサリアの町、そして命の危険と背中合わせであるローマへの長い船旅、安穩とした平穩無事的生活の中ではなく、困難そのものの連続の中でへたり込むことなく、さまざまに語り、さまざまに証しするパウロの姿はルカにと

って、まことの「英雄」の姿そのものだったのでしょうか。ルカにとってパウロは最も尊敬する、心から尊敬する人、敬愛する人だったのでしょうか。そのことがこの使徒言行録の随所に出てきますし、27章を見るだけでもよくわかるのです。弱っている人々に向かって、パウロはこういいました。「今日で十四日もの間、皆さんは不安のついに全く何も食べずに過ごしてきました。だから、どうぞ何か食べてください。生き延びるために必要だからです。あなた方の頭から髪の毛一本もなくなることはありません。」神さまに守られている、ということを繰り返し語っているのです。パウロの励ましの言葉をルカは同じ船にのり、同じように危機に遭遇し、同じように苦しんできたものとして聞いている。そしてこのパウロの言葉に、力づけられるのです。

ルカにとって、パウロは英雄である、ということは、もちろん彼を神格化する、というようなこととは全く違うことです。一人の人間として心から敬意を表する、という意味でそうなのです。そして同時に、斯くまで、パウロを根本から支え、力づけ、勇気を与え給う、神の恵みに、イエス・キリストの恵みに、ルカはそのたびごとに驚き、感謝をささげていた。それがこの航海記録の背後にあるものなのです。イエス・キリストに生かされて、斯く勇敢に、果敢に生きる人、福音を宣べ伝えることをやめない人、世界に目を向けて伝道すると同時に、自分の置かれた場所のどこでも、福音を語り続けた人、ルカは、そのようなパウロを英雄として尊敬し、そのありのままを使徒言行録の中に書きとどめているのです。